

2021年3月14日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

民数記 15 : 27～31

ルカによる福音書 12 : 41～48

「忠実で賢い管理人」

<主人を待つ僕>

41 節には、そこでペトロが「主よ、このたとえはわたしたちのために話しておられるのですか。それとも、みんなのためですか。」と言った、とあります。

「このたとえ」とありますが、前回は、イエスさまが弟子たちに、主人を待つ僕の話を書きました。主人は出かけており、いつ、何時に帰ってくるか分かりません。ですから僕は、腰に帯を締め、ともし火をともし、目を覚まして、いつ主人が帰ってきても、すぐにちゃんとお迎えをする用意を整えておかなければならない。そしてある日、帰って来た主人は、用意を整えて主人を待っていた僕を喜ばれる。そして、食卓に僕を着席させて、主人自らが給仕し、もてなして下さるだろう。そのような「たとえ」を語られたのです。

ここで言う主人とは、イエスさまのことです。そして、主人が出かけていて、いつ帰ってくるか分からない。それは、イエスさまが十字架に架けられて死に、復活し、そして天に上げられた後、再び来ると約束された、再臨の日のこと。終末の日、救いの完成の日のことを指しています。イエスさまが再び来られる日、救いの完成の日は必ず来ます。そして、復活が与えられ、主人であるイエスさまが、天の食卓にわたしたちを招いて下さるのです。

しかし、人間には、それがいつなのかは分かりません。それはまさに、今のわたしたちが生きている、この時代のことです。ですから、イエスさまのこれらの話は、イエスさまを信じて歩む弟子たちの群れ、「教会」に語りかけられています。そして、教会は、わたしたちは、イエスさまが再び来て下さり、神の国、つまり、神さまの救いを完成させて下さる。この日を待っている僕なのです。

しかも、この僕である教会は、僕のために自らが腰に帯をして給仕して下さるような主人であるイエスさまに仕えています。自分のために命をも惜しまずに捨てて下さる、それほどの愛を注いで下さる主人を待っています。十字架に架かって、わたしたちの罪のために死んで下さったイエスさま。死の中からよみがえり、新しい命と復活を約束して下さったイエスさま。すべてを支配する方となられ、天に上げられたイエスさま。このようにして、ご自分のご生涯をかけて、僕を愛し抜いて下さる主人が、イエスさまです。

このお方が、再び来られる日を期待して、待ちわびて、十分な用意を整えて。僕は、主人が喜んで下さるように、また主人が約束して下さった恵みの食卓に座らせて頂ける日を心待ちにして。油断することなく、気を緩めることなく、今か今かと備えをして待つのです。そ

れが、弟子たち、そしてわたしたち教会の、歩むべき姿です。

そして、今日のところに入りますと、ここでは、前回語られた主人を待っている僕が、具体的にどうやって待っているか、ということに注目しています。主人を待っている間、忠実で賢い管理人として歩む僕と、不忠実な歩みをする僕がいるのです。

それはつまり、イエスさまを待っている弟子たち、わたしたちが、イエスさまがいつ来られるか分からない中で、緊張感を保って、与えられた務めをしっかりと果たして待つことが出来るか。あるいは待ちくたびれて緊張感が緩んでしまい、自分勝手に振る舞ってしまうか。そのことを見つめさせようとしています。

そしてイエスさまは、忠実で賢い管理人として歩む僕は幸いだ、と言っておられます。

<忠実で賢い管理人>

さて、まず最初に、主人は出かける前に、僕を一人取り立てて、他の召し使いたちに、時間通りに食べ物を分配する、という仕事を託しました。

これは、一日に何回も他の者たちの食事の世話をするという、結構面倒で、大変で、責任の重い仕事だと思えます。食べ物のこととなれば、不平不満も出やすいでしょう。しかも、主人の帰りがいつか分からない中で、食べ物のことですから、休まず続けて仕事を行なわなければなりません。ですから、きっと主人は、この取り立てた僕のことをとても信頼し、彼ならきっとこのことをやり遂げてくれるだろうと期待をかけているに違いありません。

その主人の思いにしっかりとお答えし、忠実に仕事を果たした、賢い管理人。帰って来た主人がこれを見たなら、主人は「彼に全財産を管理させるに違いない」とあります。主人はこの僕の働きぶりを見て喜び、ますます彼を信頼し、自分のすべての持ち物を任せるのです。それは、この主人自身の仕事や生活に直接関わることであり、主人はもはや運命共同体として、この僕を受け入れ、共に歩む決意をした、ということでしょう。

それはまさにイエスさまが、ご自分に従い、神の子とされた者たちに、神の国を下さるということ。復活と永遠の命を与え、神さまの御国を受け継がせて下さるということでしょう。

<不忠実な僕>

一方、悪い僕の話は、こう語られています。「しかし、もしその僕が、主人の帰りは遅れると思えば、下男や女中を殴ったり、食べたり飲んだり、酔うようなことになるならば、その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。」

この僕もまた、主人が信頼して仕事を任せただけですが、今度の僕は「主人の帰りは遅れると思った」とあります。いつ帰るか分からない。そのうち緊張感がゆるみ、主人の存在感が薄れてきます。主人はしばらく不在だ。そして今、自分には色々な権限を任されている。他の召し使いに与えるべき食べ物、管理すべきものが、自分の思い通りにできるところにある。

その時、この僕は、まるで自分が主人かのように振る舞い出したのです。共に主人に仕え

る他の仲間の召し使いたちに、自分の言うことを聞けと言って、殴ったりする。食べ物、飲み物はただ主人から管理を任されて与っているだけのものなのに、自分が僕であることを忘れ、それを自分のものかのように、食べたり、酔うほど飲んだりしたのです。

実はこれは、わたしたちが主人を待つことを止め、主人の思いを見つめることをやめ、自分の欲望に目を向けたときに現れる、人間の罪の姿です。わたしたちは、いつ来るか分からない終わりの日に、帰って来られた復活のイエスさまの御前に立つのだ、と言う緊張感を失うと、与えられている人生を、命を、まるで自分が主人であるかのように支配して、歩もうとするようになるのです。

主人を主人としない。神を神としない。自分の人生の主人は自分だと思いこむ。すると、主人に託された働きを果たすよりも、自分が望むことを行なう方が大事になってしまう。主人の言葉を軽んじ、自分の願いをこそ重んじ、自分だけを愛して、共に歩む人々を愛することが出来なくなる。

・・・わたしたちは常に、イエスさまの御言葉を見つめていなければ、再び来られる日を、緊張感を持って待っていなければ、すぐこのような罪に陥ってしまうのです。

<厳しい罰>

さて、僕が主人のようになって気持ちよく過ごしている時に、その日は思いがけずやってきます。46 節「その僕の主人は予想しない日、思いがけない時に帰って来て、彼を厳しく罰し、不忠実な者たちと同じ目に遭わせる。」

不忠実な者たちとは、「不信仰な者たち」と訳すこともできます。つまり、主人に信頼しない者たち。主人を抛り所とせず、自分の思うままに歩もうとする者たち。主人から離れて歩んでいる者たち、ということです。

主人は、「彼を厳しく罰し、その不忠実な者たちと同じ目に遭わせる」と言います。これは、直訳すれば「彼を二つに裂き、不忠実な者たちと同じ場所に置かれる」となります。僕であることを忘れ、自分が主人のように振る舞った僕は、今で言う八つ裂きにされて、主人から離れたところにいる者たちと、同じところに置かれる。主人との関係を失い、滅ぼされてしまう、ということでしょう。

それはつまり、神さまとの親しい関係を失い、神さまのご支配の下にいられなくなる、ということです。神さまは、命の造り主であり、死を超えたわたしたちの存在をも支配しておられるお方です。恵みをもって、わたしたちを養い、守り、救って下さるお方です。わたしたちは、この方から離れては生きられません。それは、まことに厳しい罰です。

<主人の思い>

しかも続けて、「主人の思いを知りながら何も準備せず、あるいは主人の思いどおりにしなかった僕は、ひどく鞭打たれる。しかし、知らずにいて鞭打たれるようなことをした者は、打たれても少しで済む。」とあります。

「主人の思いを知りながら」。つまり、主人が僕を信頼し、御自分の大切なものを任されたこと。他の召し使いたちにして欲しいと願われたこと。主人が、あなたにこうして欲しいと望んで、委ねられたこと。

それを知らされていながら、そのようにしなかった僕は、主人の思いを知らされていなかった者よりも、ひどく鞭打たれるというのです。知らされている者は、知らない者よりも、より重い責任と罰があるというのです。

この主人の思いとは、神さまの御心、ご意志、神さまの救いのご計画ということです。神さまはイエスさまを通して、御言葉を通して、わたしたちに救いのご計画を明らかにして下さっています。

それは具体的には、神の御子イエスさまが、僕であるわたしたちのために、身を低くして人となられ、僕であるわたしたちのために、ご自分の命を捨てて、罪と死から救い出して下さるといふご計画です。そしてわたしたちが、神さまを愛し、隣人を自分のように愛するようになる、ということです。それが、神さまの思いであり、ご計画です。

御言葉が語られ、人はこの神さまの思いを知らされています。今わたしたちも知らされています。神さまの愛を伝えられ、救いが、イエスさまの命が、目の前に差し出されています。

それなのに、この主人の思いを無視し、思いどおりにしない。それは、この、神さまの愛に応えないということです。差し出された救いを受け取らない、ということです。神さまを愛さない。隣人を愛さない。神さまの御言葉に耳を塞ぎ、差し出された御手を払いのけるということです。

そういう者は、まだ神さまの恵み、救いのご計画を知らない者よりも、ひどく鞭打たれるのだ。厳しい罰を受けるのだ。そう言われているのです。

<多くを与えた>

それならば。わたしたちは、むしろ知らない者であった方が良かったと思うのでしょうか。主人の思いを。神さまの愛と、救いのご計画を。自分を憐れみと慈しみの眼差しで見つめ、命を養い、喜んで神の国を与えて下さるこの方を。知らない方が良かったのでしょうか。

決してそんなことはありません。

これは決して、イエスさまの救いを知らされているクリスチャンは、忠実に神さまに従わなければ、恐ろしい酷い目に遭うぞ、罰を受けるぞ、という脅しではないのです。

わたしたちが改めて思い起こさなければならないのは、主人に従わなかった、神さまの御心に背いたわたしたちのために、厳しい罰を受け、八つ裂きにされ、ひどく鞭打たれ、神さまから離れたところ、呪われた十字架の上に置かれたのは、他でもない、このイエスさまではなかったでしょうか。

わたしたちの主人は、そのようにしてまで僕を生かそうとして下さるお方です。そこまでして、僕と共に歩むことを望んで下さるお方です。わたしたちが受けるべき厳しい罰も、御

自分が身代わりになって担って下さるようなお方が、わたしたちの主人であり、わたしたちの神なのです。

ですからわたしたちは、この厳しい御言葉を聞いたなら、このことを語って下さったイエスさまご自身が、わたしの罪のために血を流して下さった、その十字架の御前に立って、この言葉を真剣に受けとめなければならないのです。

48節の後半に、「すべて多く与えられた者は、多く求められ、多く任された者は、更に多く要求される。」とイエスさまは語っておられます。

つまりイエスさまは、ご自分の僕となる者、弟子たち、わたしたちには、もう、すべて多く与えている、と仰っているのです。わたしたちに与えられたのは、イエスさまの命です。神の国です。罪の赦しです。死を克服する、新しい命と復活です。天地の造り主である神さまの子どもとされて生きる幸いです。もう、神さまの思いに従って、それはすでに、豊かに、与えられているのです。

そして、多くを任せている。あなたがそれに応えてくれることを、期待して、信頼して待っている、ということです。わたしたちが、神さまの愛を受け取り、救われ、罪から解放され、新しく生きることを、愛に生きる者となることを、神さまは信頼し、望み、期待して下さっているのです。

まず、神さまの思いを知らされている者は、多く与えられた者であること。この幸いを覚えるべきであると思います。あなたのことをすべてご存知の神さまが、あなたを愛し、必要を備え、求めるなら神の国を喜んで与えて下さるのだ、と知らされているのです。そして、イエスさまの命がわたしたちに与えられたことを、告げられているのです。

そして、その神さまが与えて下さったことの多さに、大きさに、広さを知り、圧倒される時、わたしたちは、この愛に応えるために、どれだけ自分を献げ尽くしても足りないほどであることを知るのです。

ですから、これはイエスさまが、このような幸いを与えられていながら、なぜ、あなたはそれを拒み、主人の思いを受け入れないのか。なぜ、神さまの愛と救いを受け入れず、滅びへと向かっていこうとするのか。そうなのはいけない。あなたに命を与え、生かし、救い、共に歩みたいと願っておられる、神さまのご意志に、忠実に従って生きるところにこそ、本当の幸いがあるのだ。だから、あなたたちは忠実で賢い、「幸いな僕」になりなさい。与えられた恵みを感謝して受け取り、罪を赦され、あなたを愛してやまない主人と、共に歩む者となりなさい。そして、あなたはこの主人を愛し、喜んで、与えられたものを神さまのために用いて、わたしが救いを完成させる日を待っていなさい。

そう、イエスさまは教えて下さっているのではないのでしょうか。

<主人を待つ>

神さまは、わたしたちがまるで悪い僕のように、弱く、自分勝手な、罪深い者であるにも

関わらず、わたしたちが神さまの愛に応えることを信じて下さっています。愛を注ぎ続け、イエスさまを遣わし、この御子の命を与え、わたしたちがこの恵みに生きることを望んで下さっています。

そして、さらには、ご自分の救いの計画の一部を、任せたいとまで言って下さいます。教会は、神さまの救いの御業に、神さまのお働きに、共に仕えていく群れです。わたしたちは、救いの御言葉を宣べ伝えます。受け取ったイエスさまの救いの恵みを、証して歩みます。隣人のために執り成し祈り、神さまの愛を伝えます。そして、この歩みに必要なものは、すべて神さまがご存知であり、神さまが備え、わたしたちに聖霊を与え、イエスさまが再び来られる日まで、導いて下さるのです。

ですから、わたしたちもまた、愛して下さい、信頼して下さい、心からの信頼を置き、この方から受けた多くのものに、感謝して、喜んでお応えしたいのです。神さまが、わたしたちと共に歩むことを御心として下さった。この神さまの思いを、わたしも自分の思いとして、目を覚まし、主に忠実に従いつつ、終わりの日まで歩ませていただきたいのです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちにすべて多く与えて下さったこと。わたしたちが、あなたと共に生きる者となり、あなたと共にご計画を見つめて歩む者となることを御心として下さり、そのためにイエスさまの命さえも与えて下さったことを、心から感謝いたします。そして、この恵みを知る者とされていることを、心から感謝いたします。

しかしなお、わたしたちは緊張感がゆるみ、終わりの日を待ち望むことを忘れ、日々の思い悩みに埋もれたり、自分の欲に振り回されて、自分が主人のようになり、あなたに従うことを忘れてしまう者であります。わたしたちの罪をお赦し下さい。

素直に、真剣に御言葉を聞き、そこに語られているあなたの愛を、救いを受け入れ、あなたの思いに感謝して従う者として下さい。復活と永遠の命の希望を抱いて、主の食卓に招かれる日を待ち望んで、神の子として、日々をあなたに喜ばれるように歩む者として下さい。

そして、あなたから与えられたすべてのものを、大切に受け取り、あなたのために賢く用いることが出来ますように。共にあなたに仕える仲間たちを、愛することが出来ますように。福音を宣べ伝える働きに、少しでもお役に立って、喜ばれる者となることが出来ますように。

そしてどうか、このことをなすために、わたしたちに聖霊を与えて下さい。

主イエス・キリストの御名によって、お祈りいたします。アーメン